



ニューヨーク：マンハッタン 1958年 油彩

企画展

線の画家

ベルナール・ビュフェ

2022年3月12日(土) – 2023年3月26日(日)

前期 2022年3月12日(土) – 2022年9月27日(火)・後期 2022年9月30日(金) – 2023年3月26日(日)

ベルナール・ビュフェ美術館

当館のコレクションから、ビュフェの特徴といわれる「線」の変遷に注目して構成。同時に、初期から晩年までのビュフェの人生、作品をたどる展覧会です。開催中は、全館で100点超の作品をお楽しみいただけます。後期には一部作品を入れ替えます。

HIGHLIGHTS

新館展示室

「線」の画家 ベルナール・ビュフェ ビュフェの線の変遷とその人生をたどる

画面を覆うひっかき傷のような線、黒い輪郭線、鋭く突き刺さる垂直線…ベルナール・ビュフェといえば「線」で語られてきました。しかしその線は決して一様ではありません。ビュフェの「線」はいつ生まれ、画家は「線」で何を表現しようとしていたのでしょうか。

ビュフェの線の変遷とその画家人生を100点超の油彩や版画でたどります。

<線が生まれるまでと初期の線>

第二次世界大戦直後に描かれた初期作品では、鉛筆で描きこまれた無数の線、そして細い線を幾筋も重ねるように描かれた輪郭線が目を引きまします。戦後の空気と、その痛いような線の表現は見事に呼応し、ビュフェは19歳にして批評家賞を受賞します。当館の創設者が「絶望のオリジナリティ」と呼んだビュフェの「悲哀と絶望に満ちた線」は、たちまちのうちに世界を席卷し、ビュフェを時代を代表する画家にしました。「線」は、一目でわかるビュフェの代名詞となっていたのです。



《村の通り》 1946年 油彩



《水差しのある静物》 1949年 油彩



《ドン・キホーテ、鳥と洞穴》 1988年 油彩



《えび》 1958年 油彩

<線の発展とビュフェの生涯>

やがて戦後の空気が薄れ、ビュフェへの評価が変わっても、ビュフェは自身の線を追求し続けます。時にはますます太く黒く世界と「もの」を隔て、時には、絵の具のかたまりとしてカンヴァスに厚く盛り上がり、時にはいまにも溢れ出さんばかりの色彩を封じ込め、時には細く繊細に風景を彩ります。1980年代には、ビュフェは自在な線を駆使し、《ドン・キホーテ》の壮大な物語の個性的な登場人物たちを描き出します。晩年、病に侵されてからも、ビュフェの線の力は変わりません。最後のテーマ展「死」の連作にいたるまで、ビュフェの線の変遷にみちびかれながら、その画家人生をたどります。

HIGHLIGHTS

ビュフェの時代

本館 中展示室

サン＝ジェルマン＝デ＝プレの時代

ベルナール・ビュフェ美術館導入部分となる本館・

中展示室では、

初期作品を通じて、ビュフェがデビューした時代の空気と、その作品が当時どのように受け入れられていたかを紹介します。



《肘をつく男》 1947年 油彩

ベルナール・ビュフェは1928年パリ生まれ。10代のほとんどを第二次世界大戦中に過ごしました。戦中・戦後の物資の乏しいときにも、工夫をかさね絵を描き続け、1948年、19歳での『批評家賞』の受賞をきっかけに、一躍人気画家となります。

ちょうどこのころ、1940年代末から1950年代にかけては、さまざまな分野の文化人、芸術家たちがパリのサン＝ジェルマン＝デ＝プレ界隈のカフェで交流し文化を生み出していました。神経質な細い線、色彩のなさ、投げ出されたかのようなモチーフなど、ビュフェの表現は、サン＝ジェルマン＝デ＝プレの“顔”であったサルトルやカミュの思想とも



《吊るされた鶏のある静物》
1948年 油彩



サン＝ジェルマン＝デ＝プレ界隈

結びつけられ、熱狂的に支持されました。そうしたパリの空気の中、ビュフェは時代のシンボルとなっていたのです。

ビュフェの初期作品、およびパリを描いた作品とともに、サルトル、サガン、グレコなど、時代を彩った面々をとらえた写真も展示します(撮影：ロベール・ドアノー)。ベルナール・ビュフェを生み出した時代である「サン＝ジェルマン＝デ＝プレの時代」を感じてみてください。



ベルナール・ビュフェ (Bernard Buffet, 1928-1999) はフランス・パリ出身の具象画家。19歳の若さで批評家賞を受賞し衝撃的にデビュー。黒い輪郭線と抑制された色使いで、第二次世界大戦後の不安や虚無感を描きだしたと支持され、一躍ビュフェ現象を巻き起こした。その独自の表現は、没後20年を過ぎた今、あらためて注目を集めている。

【広報用画像資料】

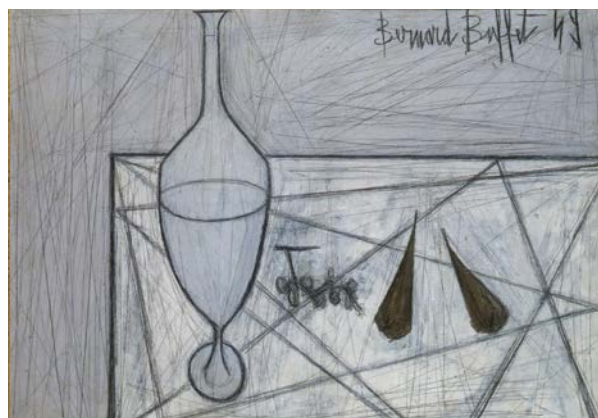
広報用にお使いいただける画像をご用意しています。

お申込み、お問い合わせについては次ページをご覧ください。

クレジット表記は各画像下の内容をご利用ください。(原題表記が必要な場合お問い合わせください)



1 《ニューヨーク：マンハッタン》1958年 油彩



2 《水差しのある静物》1949年 油彩



3 《えび》1958年 油彩



4 《ペロス＝ギリック》1973年 油彩



5 《ドン・キホーテ、鳥と洞穴》1988年 油彩

お願い ・クレジット表記は前ページ画像下の情報をご利用ください。

・掲載誌一部をご送付ください／掲載サイトの URL をお知らせ下さい。

・取材にご来館くださる場合は事前に担当者までご一報ください。

☐ **1** 《ニューヨーク：マンハッタン》1958年 油彩

☐ **2** 《水差しのある静物》1949年 油彩

☐ **3** 《えび》1958年 油彩

☐ **4** 《ペロス＝ギレック》1973年 油彩

☐ **5** 《ドン・キホーテ：鳥と洞穴》1988年 油彩

GENERAL INFORMATION

ベルナール・ビュフェ美術館 <https://www.clematis-no-oka.co.jp/buffet-museum/>

所在地	〒411-0931 静岡県長泉町東野クレマチスの丘 515-57 TEL 055-986-1300 FAX 055-987-5511
入館料	一般：1,000円（900円）高・大学生：500円（400円）中学生以下：無料（ ）内は20名様以上の団体割引
休館日	水曜日・木曜日（ただし2022年3月17・24・31日および5月4・5日は開館）、祝休日の場合は開館し、続く金曜を休館、年末年始（2022年12月26日（月）～2023年1月5日（木）） ※公式サイトでのご確認をお願いいたします
開館時間	10:00-17:00（3月-10月）／10:00-16:30（11月-2月）入館は閉館の30分前まで
アクセス	自動車の場合 新東名・長泉沼津 I.C. または東名・沼津 I.C. →伊豆縦貫道（東駿河湾環状道路）→長泉 I.C. 出口 R246を右折／「城山」交差点左折／静岡がんセンター方面へ（新東名長泉沼津 I.C. より約5km） 電車の場合 JR東海道線〔三島駅〕下車 北口／新幹線口・バス3番乗り場発 無料シャトルバス『クレマチスの丘』行き（10:00-17:00 毎時00分発 所要時間25分）

※2022年度中に限り、休館日、開館時間が変更になっております。ご注意ください。



会期中 同時開催の企画展「堀内誠一 絵の世界」

2022年3月19日（土）－7月25日（月）

伝説のアートディレクターであり、デザイナーであり、絵本作家でもあった堀内誠一の「絵の世界」に注目する展覧会。今回、初公開となる10代の時に描いた油絵作品などを出発点に、絵本の原画、デザインにおける作画、雑誌のためのカットなど、堀内の創作の原点ともいえる「描くこと」をひもときます。ときに愛らしく、ときに鋭くアヴァンギャルドな堀内誠一の絵の世界をどうぞお楽しみください。情報は公式ページから。プレスリリースもご用意しています。

『ぐるんぱのようちえん』1965年
『たろうのおでかけ』1963年
『こすずめのぼうけん』1976年
すべて部分

主催：ベルナール・ビュフェ美術館
特別協力：堀内事務所 協力：福音館書店、マガジンハウス
企画協力：アートキッチン
後援：静岡県教育委員会、長泉町教育委員会、清水町教育委員会、裾野市教育委員会、沼津市教育委員会、三島市教育委員会、静岡新聞社・静岡放送